



グループごとにアイデアをわかりやすくまとめる参加青年たち(情報とメディアグループ)

「東南アジア青年の船」事業

Ship for Southeast Asian and Japanese Youth Program (SSEAYP)

「東南アジア青年の船」事業は、1974年のインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ各国（当時のASEAN5か国）との首脳会談による共同声明に基づき、ASEANと日本による青年国際交流の共同事業として開始したものです。1995年からブルネイ、1996年からベトナム、1998年からラオス、ミャンマー、2000年からカンボジアが参加し、これらASEAN各国の協力の下で、日本政府が実施しています。

ASEAN10か国の青年と船内で共同生活をしながら、ディスカッションや文化交流を行います。

東南アジア各国から選び抜かれた青年とのネットワークを構築するとともに、アジア地域の未来を担う人材の育成を図ります。

[事業概要]

活動内容： ディスカッション活動、各国紹介、委員会活動、参加者による自主企画、表敬訪問、ホームステイ、課題別視察等

ディスカッションテーマ： ①防災と復興 ②多様性と社会的包摂 ③教育
④雇用とディーセント・ワーク ⑤環境と持続可能性
⑥健康とウェルビーイング ⑦情報とメディア
⑧ソフト・パワーと青年外交 ⑨青年の起業

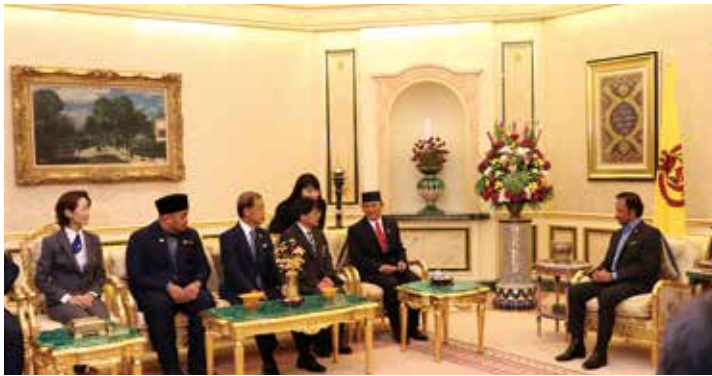
※2019年度の例

参加国： ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム、日本

参加青年数： 日本参加青年40名程度、外国参加青年10か国280名程度

訪問国： ASEAN諸国4か国程度

運航期間： 11月～12月（40日間程度）



H.M. Peduka Seri Baginda Sultan Haji Hassanal Bolkiah Mu'izzaddin Waddaulah国王陛下に拝謁(ブルネイ)



ヤファ株式会社にてオフィス見学(情報とメディアグループ)

■参加青年の感想

私が内閣府青年国際交流事業の存在を知ったのは、2017年の夏、ミャンマーへ行く飛行機でした。たまたま隣に乗り合わせた日本人女性が世界青年の船の既参加青年で、彼女から**素敵な出会いや経験を沢山聞いて興味が湧き**、ミャンマーに着くや否や事業について検索したのを今でも覚えています。

今回の事業の中で私が学んだことは、「**対話の重要性**」です。東南アジア10か国と日本、異なるバックグラウンドを持つ青年たちとの交流は、決して容易なことではなく、言葉や価値観、文化の違いに何度も直面しました。

しかしある日、ファシリテーターのネリーが参加青年に送ったある言葉のお陰で、世界の見え方ががらりと変わりました。彼は、「相手のことを深く知ろうとしなさい。私たちは対話を通して、時に互いに共感し、時に誰かの苦しみを知る。事実を受け止め、多様性を知ること、固定概念を捨てるようになる」と言い、多文化交流における対話の重要性を教えてくれたのです。その時の私は、沢山の人のとの出会いの中で環境の変化に戸惑っているだけでした。彼の言葉をきっかけに、戸惑い、混乱するのをやめて、**目の前の人やその背景にある価値観に向き合い、対話を大切にすることを始めました。**

“Deep conversations” をキーワードに、キャビンメイトやSGメイトの外国青年や日本青年と、何気ないその日の出来事や、家族、宗教への考え、将来の話といった色々なことをより深く話す時間を作るようにしました。特に船のデッキで絶景の夕日を見ながら友達と話したあの風景は、忘れられません。印象的だったのは、ある日キャビンメイトと、過去のつらい経験や悩みについて話し、気付けばいつの間にか抱き合いながら泣いていたことです。国や宗教は違えど、心の中で同様のことに悩み苦しんでいる友達がいて、悩みや苦しみを共有しただけで、心が楽になり、互いの距離がぐっと近くなった気がしました。対話をきっかけに、相手のことを深く知っていくと同時に、**違いから自分の個性や考え方を認識**する過程を通して、私の価値観や世界が広がっていることを感じました。

事業前にはミャンマーにしか関心がなかった私ですが、対話を通して新たな発見が沢山あり、**事業を終えた今、東南アジアの全ての国がキラキラして見えます。**東南アジアの中のミャンマー、ASEAN と対日関係など、ミャンマーをより多角的な視点で見られるようになりました。1月から始めるミャンマーでのインターンシップでさらにミャンマーの社会や現状を見つめていきます。そしていつかミャンマー、そして東南アジアと日本をつなぎ貢献できる人材になります。



清水 万由 (2018年度参加)
(写真右)



グエン・ティ・ミン・カイ高等学校にて現地青年と楽器を通じて交流する参加青年たち(ベトナム)



船内でのソリダリティー・グループ活動



平和な社会を構築するためにはなぜ教育が重要かについて発表する参加青年たち(サマリー・フォーラム/平和な世界をつくるための教育コース)

「世界青年の船」事業 Ship for World Youth Program (SWY)

1967年度開始の「明治百年事業」にルーツがある事業で、国際化や多様化が進展する社会でリーダーシップを発揮して、社会貢献を行うことができる青年を育成することを目的に実施しています。リーダーシップや異文化理解を、理論・実践の両面で強化することに重点を置いています。

毎年異なる世界10か国から集まる外国青年と、約1週間の陸上研修と約1か月間の船上研修(訪問国活動を含む)に参加し、共同生活をしながら、ディスカッションや交流活動を行います。

[事業概要]

活動内容:

ディスカッション、セミナー、ナショナル・プレゼンテーション(各国事情紹介)、文化紹介活動、スポーツ&レクリエーション、グループ活動、自主活動、表敬訪問、各種施設の視察、訪問国の青少年との交流など

ディスカッションテーマ:

- ①文化遺産の保護 ②グローバル・シティズンシップ
 - ③地球環境と気候変動: 行動と変化のためのツールを磨く
 - ④多文化共生 ⑤健康とウェルビーイング ⑥平和構築と国際協力
 - ⑦平等な社会におけるテクノロジー: 倫理的かつ責任あるソーシャルメディアとAIの活用
- ※2019年度の例

参加国:

バーレーン王国、ブラジル連邦共和国、エジプト共和国、フランス共和国、英国、ケニア共和国、メキシコ合衆国、ニュージーランド、ペルー共和国、スリランカ民主社会主義共和国及び日本

※2019年度の例

参加青年数:

日本青年120名程度、外国青年10か国120名程度

寄港地:

ハワイ諸島、エンセナーダ(メキシコ合衆国西海岸)

※2019年度の例

運航期間

1月~3月(35日間程度)



メディアインフルエンサーについてのポスター発表
(グローバル・シティズンシップコース)



トルコ参加青年が主催したトルコ語クラブ

■参加青年の感想



椿 竜太郎 (2018 年度参加)
(写真右から4人目)

私は「世界青年の船」事業で、ヒト、組織の可能性を最大限広げるといった価値観の下、四つの活動を行いました。

一つ目は、自分自身を知るところをテーマにDream Mapというセミナーを実施しました。Dream Mapとは自分の夢を描き、人生を豊かにするためのツールです。セミナーでは日本参加青年5名のチームメンバーが一丸となり、年齢や経歴、価値観が異なる11か国の青年たちを巻き込み、「何を大切に軸として生きているか」について語る時間を作り上げることができました。人材育成に関心があるため、本経験を糧に、10年、20年後を作り出す若年層の気づきの場を作り出す活動を今後行っていきたいです。

二つ目は、自主活動で朝と夜にヨガのクラスを開催したことです。マインドフルネスに関心を持つ私が船上で必ずやり遂げたかったことがこのヨガのクラスの開催でした。本事業は、日本を含む11か国の青年たちと約40日間を衣食住を共にする刺激的なプログラムです。ただし、船上という閉鎖的な空間です。その環境下で、「今、この瞬間」という個人の時間を作り、癒し又は新しい気づきを得る環境を作りたいという思いがありました。朝日が昇る中のクラスと星空の下で行うクラスを実施でき、最終的には、Dream Mapを行う前に240人に向けた瞑想のクラスまで開催できました。**自分から発信し、環境を提供し、思いを実現することの大切さ**を学びました。

三つ目は、**日本の文化を世界に発信**するために担当したヲタ芸です。プライベートでは縁がなかった日本の文化の一つであるヲタ芸を、日本のナショナル・プレゼンテーションで披露しました。約4か月間の練習を通じて、よりリアルに近いものを作り上げ、現在の日本文化を海外の参加青年に提供できました。

四つ目の書道クラブでは、日本以外の10か国の青年たちに漢字を通して日本文化を理解してもらいました。参加青年の名前を漢字にして造語を作ることや好きな言葉を漢字で書き、乗船期間中のカレンダーを作成しました。さらに、参加青年が考える「日本を漢字に例えると何ですか」という問いへの答えを大きな半紙に描きました。また、書道クラブの担当メンバーがパフォーマンスを披露し、多くの参加青年たちに感動したと言ってもらえました。

本事業では、四つの活動を通して、**自分に自信を持てるよう**になりました。今後も、「今、この瞬間」という時間の使い方を大切にしながら、ヒト、組織の可能性を最大限広げるといった価値観を体現していきます。



レター・グループ対抗のスポーツ&レクリエーション



寄港地活動にてProvenance Artsを訪れ、先住民族の伝統文化を学習
(ダーウィン/オーストラリア)



国際青年交流会議にて議論する参加青年たち

国際社会青年育成事業

International Youth Development Exchange Program (INDEX)

内閣府の青年国際交流事業において最も歴史のある事業で、1959年（昭和34年）の上皇陛下の御成婚を記念した「青年海外派遣事業」、1993年（平成5年）の天皇陛下の御成婚を記念した「国際青年育成交流事業」に由来し、2019年のお代替わりを契機に、より現代のグローバル社会に沿った国際的視野を持つ青年の育成を行う事業として生まれ変わりました。

具体的には、欧州・アフリカ、北米・中南米、アジア・大洋州の各地域の課題をテーマに設定し、当該課題を抱える域内2か国に日本青年を派遣してマルチ・ケース・スタディを行い、現代の複雑化したグローバル社会に沿った国際的視野を持つ青年を育成することを目的としています。

【事業概要（派遣プログラム）】

地域・テーマ： 欧州・アフリカ：「自国のアイデンティティと多文化共生」

北米・中南米：「災害対策」

アジア・大洋州：「東南アジアと日本の労働社会（実務教育・職業訓練）」

※2019年度の例

活動内容： テーマに基づく視察、現地青年との合宿ディスカッション、日本文化紹介、国際協力活動の体験、ホームステイ等

派遣国： 欧州・アフリカ：オーストリア共和国とリトアニア共和国

北米・中南米：メキシコ合衆国とペルー共和国

アジア・大洋州：フィリピン共和国とベトナム社会主義共和国

※2019年度の例

参加青年数： 12名程度×3地域

派遣期間： 9月～10月（18日間）

※派遣プログラム後の国際青年交流会議にて、招へい国青年と交流・討論

【参考】招へいプログラム

招へい国： オーストリア、リトアニア、メキシコ、ペルー、フィリピン、ベトナム

招へい期間： 10月頃（16日間）

招へい青年数： 8名程度×6か国



Ines Stilling女性・家族・青年大臣を表敬訪問(オーストリア)



GK Encharmed Farm Innovations (低所得者の起業支援をするNGO)を訪れ、労働者に質問する参加青年(フィリピン)

■参加青年の感想



入江 さくら

(2019年度参加、メキシコ・ペルー派遣団)

国際社会青年育成事業 (INDEX) では、各団が**派遣国に関連したテーマを持って派遣に臨みます**。私の参加した**メキシコ・ペルー派遣団のテーマは、「災害対策」**でした。派遣中は、現地の国家災害対策本部や、世界トップレベルの研究施設を訪れました。私には、海外青年とのディスカッションを始めとしたこの**事業での経験から得た大きな学びが二つ**あります。

一つは、自国の取り組むべき社会問題はもはや地球規模で取り組む課題に変わってきており、**世界との協働が不可欠**だということです。災害対策を例に挙げても、現代では、気候変動や異常気象によって自然災害は深刻さを増し、過去に自然災害が起っていた国だけでなくどの国でも災害が起こりうる状況にあります。よって、国家間で協力し、技術や経験に富んでいる国がその知識を世界と共有し、活用する必要があると感じました。派遣中、特に印象的だったのが、ペルーでJICAを訪問した際、現地駐在職員の方がおっしゃっていた、「**一方的な支援だけでなく、相手国の状況と意思決定を尊重し、継続的で自立的な**

支援を心掛けている」という言葉です。日本が支援をする際、日本の持っている技術や仕組みを相手国に導入すれば、効果的で簡単かもしれません。ですが、現地の仕組みを用いたり、現地に合う提案をしたりと一見遠回りに見えるような施策は、長期的な視点で自立を促す取組です。この視点は、**世界が協働して問題を解決していく中でとても大切な価値観**だと感銘を受けました。

二つ目に、特に外国青年とのディスカッションを通じて強く感じたのは、「**YOUTH POWER**」の存在です。日本語にすると、**社会に対して変化をもたらす、社会に対して変化を訴える「若者の力」**となるでしょう。ディスカッションでは、特に一人一人が「**YOUTH**」として何ができるかにも焦点を当て、議論を進めていきました。ディスカッションに参加していた青年の中には、強いオーナーシップ（自分自身の課題として情熱と責任感を持って取り組む姿勢）を持って課外活動に参加したり、団体を立ち上げたりする人がいたこともあり、「**青年同士が国を超えて結束すれば、社会を変えることができるのでは**」、そう思わせてくれるほど、**議論の場は、熱意と、変革への希望に満ちあふれていました**。私たち若者自身が、問題に対して行動を起こさなければ、何も始まらないと強く感じました。

事業が終了してからも、プログラムを通じて得た数々の学びと経験を基に、次のステップへつなげてゆく決意です。



UNAM(メキシコ国立自治大学)地球物理学研究所にて、説明を受ける参加青年たち(メキシコ)



リトアニア青年に日本の茶道を紹介する参加青年(リトアニア)